

関西モダニズム再考

竹村 民郎・鈴木 貞美(編)

「阪神間モダニズム」とを加起来「関西モダニズム」そのなかで鈴木貞美の論
 という概念がある。大正からを提唱する論集である。文 文は意欲的だ。専門ごとに
 昭和初期、阪神間で先駆的 芸、美術、建築、技術史、 定義や用法が異なるモダニ
 な郊外生活が実践された。 新劇運動など、収載された ズムの概念を見事に整理
 甲子園野球や宝塚 少女歌劇などの大 錯綜する尖端と伝統に可能性
 衆娛樂も発達、関

錯綜する尖端と伝統に可能性

「近代化」を否 定することで
 し、前時代の 例示、同時進行的な「モダ
 ニズム」と「伝統の再評
 価」の動きに注目する。時

東大震災後に東京から逃避 各論は多岐にわたる。た 「近代化」を推し進めようと
 した作家や画家の活躍もあ だ、「関西モダニズム」とい する「近代主義」、ひいて
 って、東京とは異なるモダ ー新しい枠組みをめぐる挑 は「近代化主義」を批判す
 ニズム文化が展開された。 戦的な議論や、領域を横断 る。大いに共感を覚える。
 本書はそれに京都の事例 する独自の仮説は乏しい。 鈴木は1930年代に日 橋爪紳也(建築史家)